

会議名	第2回アグリフード EXPO2007 および第4回農研機構産学官連携交流セミナー
開催日時	平成19年8月28日
開催場所	東京ビッグサイト西2ホール
主催者	農林漁業金融公庫
参加人数(概数)	約4,500名(28日のみ)
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>第2回アグリフード EXPO2007</p> <p>全国の農家が自慢の生産物を持ちより、一堂に会してスーパーなどのバイヤーに売り込む大商談会である。農林漁業金融公庫が昨年からはじめ、今年度は2回目に当たる。全国から集まった400を超す農家、法人、JAが参加しており、これらは、北海道、東北、関東、北陸・信越、中部、近畿、中国、四国および九州・沖縄の10ブロックに分かれて農産物の展示、試食を通して売り込みを図っていた。このほか有機栽培農作物のブロックと関連産業のブロックが設けられていた。</p> <p>商品の性質上、試食コーナーが多く設けられていた。全般に、低コストよりは健全性、安心、良食味およびこだわりをキーワードにした高付加価値を狙った展示が多かった。有機栽培農作物のブロックは今年から新設された18のブースに出展があった。関連産業のブロックには、農薬等農作物成分の依頼分析(日立共和エンジニアリング)、抗生物質に変わる生菌剤(出光興産)、あるいは畜産物の品質向上のためのビタミンプレミックス(DMS)など、直性スーパー等の小売へのアプローチではなく、生産者向けの、健全性、安心、高品質生産に向けた商品が展示されていた。</p> <p>第4回農研機構産学官連携交流セミナー</p> <p>アグリフード EXPO2007の会場にはAおよびBの2ヶ所のセミナー会場が設けられており、シンポジウム、セミナーが開催されていた。A会場ではシンポジウムやJETRO提供セミナーなどが行われ、B会場は出展者によるプレゼンテーションが行われていた。28日午後には、B会場で開催された、(独)農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)産学官連携本部の主催による産学官連携交流セミナー「ライスミート、ライスミルク ～水田の贈り物～」に出席した。まず農研機構畜産草地研究所飼料調整給与研究チームの吉田首席研究員から、「飼料イネ技術の歴史と現状」について基調講演があり、飼料イネ研究の主な課題として育種、栽培法、収穫機械、サイレージ調製、給与技術の5課題についてその成果と現在の到達点について簡潔に取りまとめた紹介があった。続いて、同研究所関東イネ家畜飼養研究サブチームの中西サブチーム長から牛肉生産における飼料イネ給与効果について講演があり、飼料イネの特徴として牧草等に比較してカロチンが少なく、ビタミンEが多く、このことは脂肪交雑と肉の貯蔵性に有利なことが紹介された。最後に飼料イネで生産した牛肉(はまさり牛)のブランド化を推進しているTDCティードリーム株式会社の高橋代表取締役から、取り組みの経過について講演があったが、ブランド化の基本である飼養管理法の標準化と生産農家への徹底についてはあまり報告はなかった。</p> <p>飼料イネを与えて生産した牛肉(はまさり牛)および牛乳を試食したが、味、風味等に特に特徴はないように感じた。</p>

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>第2回アグリフード EXP02007 今回の展示、売り込みのキーワードは、健全性、安心、良食味およびこだわりである。今後の研究課題選定でも、このキーワードが重要となるが、小売価格が通常のものより高くとも消費者が購入するかといえは、やや疑問が残る。やはり量的な生産拡大と低コスト化に関する研究課題についても重点化を図る必要がある。</p> <p>第4回農研機構産学官連携交流セミナー 飼料イネの給与技術は、飼料イネの特徴を解析した結果、ほぼ確立しているといえる。しかし、実際には飼料イネの生産、サイレージ化等には多くの補助金が出されており、そのうえで、飼料として採算が合っているのが現状である。補助金なしで通常の飼料と同じ価格になるような、低コスト化技術の開発が必須である。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>日本食品等の海外展開に向けてのセミナーがあり、予約なしであったが聴講することができた。現在畜産物は、霜降り肉などごく限られた製品が輸出されているが、今後の展開を見守る必要がある。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>上記2.に記載</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>会場全体はかなり熱気があった。生産者が直接バイヤーと接して売り込みを図ることは極めて有意義である。</p>
<p>報告者</p>	<p>伊藤 稔</p>